



151号

2010/3/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



結婚式控え室で出番を待つ子供(右下の写真に続く)

四川省丹巴、2008年12月/影:大川健三

「わんりい」151号の主な目次

北京雑感(42)「存包処」	2
私の調べた四字熟語(40)「南柯之夢」	3
媛媛讲故事(21)「八仙の伝説」	4
アジアを読む(64)「俠骨記」	5
台湾の規則と恩恵	6
湖南省への旅(3)「張家界と鳳凰」	8
土の香りのモダンアート・農民画(7)	10
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	10
「今年は寅年・陝北の虎の剪紙」	11
3月の歌「太陽出来喜洋洋」歌詞	11
アフリカとの出会い(40)「何を待っているの?」	12
スリランカ紹介(36)「ジャフナ珍道中 XI」	14
私の四川省 一人旅(33) 垂丁19	15
「わんりい」活動報告・楽しかった新年会	18
「わんりい」活動報告・春節ミニコンサート	19
「わんりい」掲示板	20



2人の盛装した子供は結婚式後、新郎新婦の前を歩いて披露宴に向う行列を先導します。日本でも、稚児の姿の子ども達が行列の先導を勤めることがありますね。(大川)

●「中国語で歌おう!会」、3月の案内は3ページに掲載しました。

いつも車で通っている交差点の角で、住宅の解体・新築工事が始まりました。通る度に眼にしている風景なのに、解体前の家の様子が思い出せません。前々から解体の準備でもしていれば、気をつけて見ていたのですが、10日ほど間をおいて通ってみると、解体がすっかり終わって更地となり、片隅に新築のための資材が積み上げられているので、以前どんな建物があったのかはつきりとは思い出すことが出来ません。

繁盛していた商店ならともかく、しもた家風の家とか、物置然とした建物だったりすると、あったことは覚えていても、その姿は浮かんで来ないのです。以前の景色はすっかり記憶の中に埋没して手繰り寄せることが困難になっています。そんな経験が北京の変化の中にもありました。ふと思い出したので、今月はそのお話をしようと思います。

今までに、北京の変化をあれこれとお話していますが、日本には無かったので、北京で初めて見てびっくりしたことなのに、すっかり忘れていたことがありました。それは、商店の出入り口にあった^{ツンバオチュー}“存包処”です。先日、ひょんな事から^{ツンバオ}“存包”と言う言葉を思い出し、同時に初めて目にした時の驚きが蘇って来ました。

今、北京では外資系のスーパーが林立し、大勢の買い物客を集めていますが、この外資系のスーパーが私の住んでいた地域で開業したのは、2005年頃でした。それまでの北京には、所謂スーパーはありませんでした。ちょっと大きめの商店が小型のスーパーと同じような品揃えで営業していましたが、中では売り場毎に店員がいて量り売りが主でした。

しかし、デパートや個人商店と違って、一部自分で品物を手にとって見る事が出来るようになっていました。そして、このような店の入り口には必ず“存包処”という一画がありました。買い物客はそこで自分の袋類を預け、お財布だけをもって店内に入ります。つまり万引き防止策です。ある時、小さなポシェットにいろいろ詰め込んでパンパンに膨らんだものを預けようとしたら、係員が「それは持って入っても良い」と言いました。確かにそのポシェットは、口を開ければ中身が出てしまいそうなので、万引きには不向きなものでした。

係員がいてカウンター越しに荷物のやり取りをしていたのがロッカーに替わって、自主的に荷物を入れるようになりましたが、出入り口の監視は厳重で、以前預けなくて良いと言われた同じポシェットでもロッカーに入れるよう注意されたこともありました。万引き防止で仕方の無いこととはいえ、万引きをするだろうと疑われているようで、余り気持の良いものではありませんでした。

外資系のスーパーマーケットが出来た時、それを

^{チャオシー}“超市”と呼ぶようになりましたが、それまでは同じようなスタイルでも“超市”とは呼ばずに、“隆竜”か“美廉”とかお店の屋号で呼んでいました。外資系のお店があちこちに出来、このような古くからのお店も、出入り口にレジカウンターが新設されて一括で支払いが出来るようになりました。

それに連れて次第に“存包処”も無くなり、自由に入りが出来るようになりました。その代り監視の目が厳しくなって、商品棚を回り込むと監視役の店員と鉢合わせ、なんてことをしばしば体験しました。初めのうちは慣れないので、落着いて買い物が出来ませんでした。私が慣れて来ると同時に、お店のほうも工夫をしたのでしょうか、あまり気にならなくなりました。

この点、外資系の“超市”は見事なもので、開店の時から“存包処”のようなものは置かず、客はそのまま店に入ることが出来るのです。家の近くの“超市”に初めて出かけた時、真っ先に“存包処”を捜しましたが、そんなものは無くて、買い物客は自由に店内に入って行きます。なんだか嬉しくなって、入り口でカートを買って中に入りました。

平日でしたが、随分混んでいて、見て回るだけでも大変でした。人があまりにも多いので監視は大変だろうと思いましたが、気をつけて見ても、監視しているような人は余り見かけませんでした。監視カメラを上手にセットしているのか、或いはある程度の万引き被害は覚悟しているのか、多分、両方でしょうね。

実際の万引き被害がどれ程のものか知る機会はありませんでしたが、以前あれだけ監視を厳しくしていたと言うことは、被害額もかなりの額にのぼるのではないかと、勝手に想像しています。

そういえば、北京の本屋さんなどの出入り口に、レジを通さない品物を持って通ると警報が鳴る、万引き防止用のゲートが取り付けられるようになったのは、日本で普及してから余り時間が経っていない頃でした。このゲートを取り付けることで、多くのお店が“存包処”を廃止出来たのだと思います。私の知っているスーパーにはこのゲートが無くて、代わりに出口に店員を多く配置して、買い物客の袋詰めを手伝ったりしていますが、どちらも、心理的に万引きを抑制する効果はあると考えられます。

中国の社会生活の変化が著しいのは、このような機械の導入を積極的に行うからでしょうね。これは、地下鉄の改札口やバスにカード読み取り装置が設置されて交通カードが普及するのに一年も掛からなかったことも明らかです。

今月は「夢」の話です。懐かしい夢、嬉しい夢、悲しい夢そして怖い夢等々、夢にもいろいろあります。今回のお話はとてつもなく長い夢の話です。主人公はお酒に酔いつぶれて、一眠りした間に夢をみたのですが、夢の中でなんと何十年もの歳月が経過しました。

その物語が今回紹介する「南柯之夢」です。さてそれはどんな夢なのでしょう？

「南柯之夢」を辞書で調べて見ますと、

中日辞典 には、

南柯一夢(nán kē yī mèng) はかない夢、南柯の夢。唐の淳于棼が槐の木の下で眠り、大槐安国に至り南柯太守に封ぜられて栄華をきわめる夢を見たが、覚めてみると、大槐安国とは槐の南向きの枝の下のアリの穴だったという故事から、単なる夢、あるいはぬか喜びの意味に用いる。

大辞林 には、

南柯の夢 〔李公佐「南柯記」による。唐の淳于棼が酒に酔って古い槐の南柯(南にさした枝)の下に眠り、大槐安国に迎えられて、南柯郡の太守に封ぜられ20年の栄華をきわめた夢を見たという故事から〕 夢。また、はかないことのとえ。槐夢。槐安の夢。

と、載っていました。

この成語の出自は唐代の李公佐の著した「南柯太守伝」という伝奇小説で、その中に淳于棼という名の者が酔って寝た時に見た夢のことが書かれています。

唐代の淳于棼という人が誕生日に友人達と一緒に心ゆくまで酒を飲み、酔った末に、友人の傍らで眠り込んでしまいました。意識が朦朧としている中で彼は紫の衣をまとった使者に迎えられ馬車に乗って、大きな槐の木に向って疾駆して行きました。

途中は、どこまでもすばらしく綺麗で美しい景色が続き、また大勢の人が行き来している賑やかな街を通ったりしました。

馬車は何十里も行ってから、ふとある豪邸の門の前で停まりました。門の上には「大槐安国」とかかれた金の額が掛かっていました。中から一人の丞相(官位名)が迎えに出て来て、淳于棼に告げるには「国王は皇女をあなたの妻にと思し召しでございます。」というのです。

淳于棼は身に余るもてなしや待遇を受けたものですから大変驚きかつ大いに喜びました。間もなくこの高貴な皇女と結婚できたばかりでなく、なんと「南柯郡太守」に任命されたのです。

淳于棼が在位した二十年間は、南柯郡の統治は整然と秩序立って行われたため庶民から深い敬愛を受けました。彼は高い官位にあったばかりでなく、家族も幸福で、五人の男の子と二人の女の子にも恵まれました。

そのようにして幸せな日々を過ごしていたのですが、ある時突然予想だにできなかった外敵が国境を侵して来たため、彼は兵を率いてこれを必死に防ぎとめようとした。しかし、連戦連敗で外敵の侵入を防ぐことができませんでした。その後不幸なことには妻である皇女までもが病死してしまいました。ほどなく国王の寵愛も失い、太守の職も解かれてしまいました。

こうして失意のどん底にあった丁度その時に夢から覚めました。そして周りを見回すと僕が庭を掃いており、二人の友人が傍らで休息していました。周囲はなにもかももとのままでしたが、夢の中では何十年も過ぎていたのです。

南柯之夢(なんかのゆめ)

私が調べた四字熟語 30

三澤 統

♪ 「中国語で歌おう!会」3月の歌 ♪

中国四川省の楽しい民謡の名歌

〈太阳(陽)出来喜洋洋〉

(歌詞:p11)

3月19日(金) 19:00~20:30

まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

● 1月29日(金) 19:00~20:30

指導: 趙鳳英 (中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

● 参加費: 1500円(体験無料)

● 「中国語で歌おう!会」4月の講座日: 4月16日(金)

*初めてご参加の方は、体験無料です。会場、日時など「わんりい」事務局(☎042-734-5100)へ連絡し、ご確認下さい。

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp で確認も可能です。

日本の人々の間で福をもたらすとしてよく知られている神様には「七福神」がありますね。中国の民間にも、日本の七福神のような存在の「八仙」があります。「八仙」は道教の仙人達で、中国の芝居、音楽、絵画、文学作品などに大変大きな影響を与えているので、中国人で「八仙」を知らない人はいないと言っても過言ではないと思います。

この八人の仙人達はいろいろに組み合わせられてひとまとまりの集団として表現されることが多く、また仙人達はそれぞれ全く異なる雰囲気を持っており、ぼろぼろの服を纏うものがいれば、豪華な身なりのものもいますし、年寄りもいれば、若者もいます。

女の人が混ざっているかと思うと、足の不自由な人物もいて、見れば見るほど本当に不思議なグループですが、それぞれ男、女、老、少、貧、富、貴、賤を代表しているそうです。

八仙は伝説上の人物達のように思われていますが、実は、八仙は漢代から宋代に亘って輩出した道教の実在の人物達で、そのひとりひとは歴史的背景に基づいた物語の持ち主ですが、今日に至るまでの間に人々は美しい夢や希望や願いごとなどをこの八人の仙人達に託すようになりました。

八仙の人物について、明の時代以前は、いろいろな伝承がありましたが、明の以降に話が定着しました。

では、八仙の名前とその姿をご紹介します。

★^{ろろうひん}呂洞賓：中年の男性で頭に頭巾を被り、背中に剣を背負った読書人の雰囲気です。

★^{しょうりかん}鐘離漢：頭に子供のようにあげ巻きを結び、上着は紐で結ばないで、太ったお腹を出し、大きな団扇を持つ面白い姿です。

★^{りてっかい}李鉄拐：足が不自由なので、いつも鉄の杖をついているのが特徴です。

★^{ちようかろう}張果老：ひげを生やし、帽子をかぶっているお爺さんで、いつも後ろ向きにロバに乗っている

★^{らんさいわ}蘭采和：衣装がぼろぼろ、片足が裸足で、片足は靴を履いていますが、貧乏な人に見えます。

★^{かんしゅうし}韓湘子：笛を吹いている若い男です。



★^{そうこっきゆう}曹国舅：貴族が着るような豪華な服を纏い、役人の帽子をかぶり、いかにも尊い出身であるように見えます。

★^{かせんこ}何仙姑：よく蓮の花を手を持って、優しく、綺麗な顔つきで、男ばかりの八仙の中の唯一の女性です。

では、「八仙」達にはどんな物語があるでしょう。「八仙」の一人目として唐代の「呂洞賓」の名を挙げたいと思います。

呂洞賓は唐の長安の読書人の家に生まれ、幼時期は大変聡明で、一度目を通したものは全て記憶したと伝えられています。そして気宇壮大な非凡な人間として成人しましたが、嫁もとらず、ひたすら科挙試験を目指して勉強に励んでいました。あるとき、試験のために上京し、旅館で一人の道士に会いました。その道士は風格や、目つき、立ち居振る舞いなど何処から見ても只者ではないという雰囲気を漂わせています。

「お名前を伺わせて頂けますか？」と呂洞賓は訊いてみました。

「私はいつも山や谷を歩き回っている。だから私を雲房先生と呼んでも良いぞ」

と言いました。

いろいろ二人で話しを続けていると、「雲房先生」は呂洞賓に向って「浮世を捨て放浪の旅をするのはど

うですか」と誘いました。しかし、呂洞賓はまだ出世に未練がありこの申し出を断りました。

その夜、「雲房先生」が粟のご飯を炊いている間に、呂洞賓はうとうとして夢を見ました。

夢の中で自分は科挙に及第し、出世し、官界を得意満面で渡り歩き、権門の娘を娶りました。子どもや孫達もそれぞれ出世して、富貴を極めていました。ところが、呂洞賓は突然、自分でも理由の分らないまま重い罪を得、家財は没収され、牢獄に閉じ込められる身となって妻も子供も去ってゆきました。年老いてただ一人、風雨を凌ぐ家も日々の食べ物もなく、ただただ雪の中に震えて嘆き悲しんでいるところで目が覚めました。

周りを見ますと、「雲房先生」のご飯はまだ炊けていません。夢の中ではなんと四十年もの歳月が経ちましたが、実際はご飯も炊けていないほどの時間しか経っていませんでした。初めて浮世の虚しさを悟

った呂洞賓は「雲房先生」に従って修業することを決め、十回の試練を受けた成果により、仙人としての力を発揮するようになり、民のために悪魔を降服させたり沢山の善事を成し遂げて人々に尊敬されるようになったということです。

呂洞賓が受けた試練については長くなりますので次回のお楽しみにしましょう。 (続く)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

アジアを読む(64)

きょうこつ 俠骨記

宮城谷昌光 講談社文庫

久しぶりに中国の歴史小説を読んだ。時代背景がすっかり頭から抜けている…。『史記』の登場人物の名前はかろうじて覚えているものの、エピソードはまったく出てこない。最近、白髪を見つけては根本から切るという不毛なことをしているが、髪と同じく記憶も磨耗しているんだなあと寂しくなったりして。はあ。

シンプルに読んでしまえと開き直れば、うっすい予備知識でもこの短編小説集は楽しめた。しばらくぶりに会った「徳」という言葉。いろんな解釈があった気がするが、本書「買われた宰相」より抜粋

「徳とは、みえにくくわかりにくいものだが、あえていえば、『許す』と同義語になる」

なるほど。

そういえば、この短編集には、「許す」名シーンがいくつか出てく

る。例えば『俠骨記』にて。曹劌が戦いに負け、責任を感じて自害を決意した場面。剣を抜いた瞬間、宅内が騒がしくなり、主君からの使いがやってくる。

「このたびの、曹劌の軍配には、いささかの落ち度も

なく、よって謹慎する必要もなく、また自害などはけっしてならぬ。君公はそう仰せです」

許された彼は、その後、国のために大胆な一幕を演じることになる。

伝説の聖人・舜を主人公に据えた「布衣の人」では、許す場面が何度か出てくる。家族とうまくいかない舜

は、何度となく、父から母から弟から命を狙われるが、そのたびに難を逃れる。そして、弟を抱きしめて言う。「おまえのような兄おもいはいない」。また、父が亡くなったときは、「最大の批判者をうしなったことをかなしんだ」。聖人・舜の話だけにデキすぎているけれど、「許す」ことができる人は徳を身に付け、大人物になりえるのだ。

「許す」って結構大変だ。「許してしまえば楽になるのに」と思うこともある。「許して」しまって、

再度、迷惑をこうむることもあるから油断もできない。何度でも「許す」ことが「徳」に繋がるのか。大人物になる前に、疲れきってしまいそう。凡人だもの。

(真中智子)



2010年1月7日から私たち夫婦と友人Aの計3人で6日間の台湾観光に行った。観光しながら他国の規則、恩恵に触れた小文である。台湾通の人には、既知のことばかりだし、ほかの国々にも似たような仕組みがあると思う。

✿入国時のつまずき

家にあった残り物のリンゴ3つをディバッグに入れて、飛行機に乗ったのがよくなかった。貧乏性の私は旅行中にリンゴが傷むより、道中で食べてしまおうと思った。

台湾に果物を持ち込んではいけないことは知っていたが、当局を甘く見て、ナーニ、何事もなく通過できるだろうと考えていた。台湾到着後もリンゴを背中のバッグに入れたまま台湾の表玄関である桃園飛行場で入国審査を受け、手荷物受け取り場所からトランクを引き出し、そっぴ、外へ出る前に両替をせねばとあと少しで出口なのに、90度進路変更して両替所に足を向けたのが運の尽きだった。太もものあたりに柔らかい物を押しつける感じがするので、何だろうと見下ろすと…愛想のよい犬(ビーグル犬か)がなれなれしく伸び上がり、しっぽを振って私に挨拶。そして犬の首紐を握っているは紺の制服、すらりと格好の良いお嬢さん。

「フルーツを持っていませんか？」

と物腰柔らかく問われた。

その場ですぐに観念し、「有ります」と言った。ディバッグをあけてりんごの入ったビニール袋を彼女に差し出した。それから「不要、不要」と鷹揚に手を振り、欲しければあげるよと意思表示をしたが、受け付けてもらえず、私は建物の隅にある横に長い番台のようなところへ連行されてしまった。

そこには男の役人がいて、私を連行した女性検疫官はなにやら申し送りをした。「捕まえたわよ」とビーグル犬の手柄を報告しているのか。

この時点ではりんごは捨てればいいでしょ、と軽く考えていた。

係の男はハカリでリンゴ3個の総重量を計った後、英語は分かるかと聞いてきて、私ができないというと日本

文で印刷した警告書のようなものを出し、これを読めという身振りをした。次にメモ用紙に「罰金、3000台湾元」と書き、私が読みやすいようにその紙を180度回して、意味を理解するか確かめた。ありゃ！罰金だ。

そうしているときにも、私と同類の台湾人がまたもや犬の精勤によって連行されてきて、係官はそちらの対応に行ってしまった。台湾人の成り行きを横目で見ていると、一山いくらと思える小さいリンゴ数個を没収されて、納得できないのかなにやら叫んでいた。私を差し置いて台湾人の処置を先にはじめた。文句は言えないが係官様、早くこっちへ戻って書類を作ってくれ！

時間はのろのろと進み、私はあせった。予定では速やかに飛行場を去り、台北行きのバスに乗る。台北からは電車を乗り継ぎ、今夜宿泊の「九份」という観光地までバタバタといく。順調なら宿に荷物を置いて暗くなる前に街並みの見物もしよう、と目論んでいた。しかし自分の不注意で足止めだ。検疫係官はこちらに戻るとパスポートを調べて名前を記入したりして、裁定書類をつくり始めた。覗き込むと複写用紙に台湾の漢字である画数の多い「繁体字」で書き込んでいる。この時はわざとゆっくりするための仕掛けが繁体字のように思った。

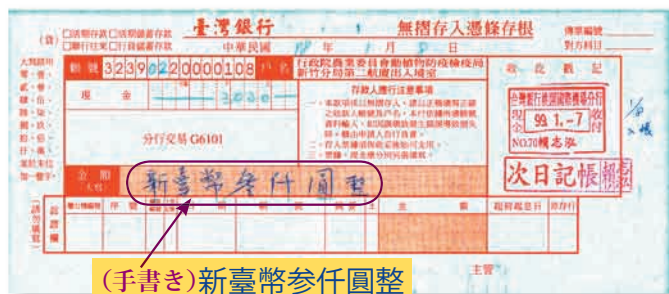
やっと書類が整い、罰金を払うところまで進んだ。その場で払うものと思ったので、台湾紙幣の持ち合わせがないというつもりで「マネーチェンジ、マネーチェンジ」と訴えだが取り合ってもらえず、彼に連れて行かれたのは行きたかった両替所。それも「台湾銀行」に限らしい。両替所と罰金支払いは同じ窓口なのだ。窓口で払い込み票(左下図)を出して支払いを済ませ、やっと放免となった。成り行きを見ながら待っていた2人には1時間も待たせてしまい、迷惑をかけた。桃園飛行場ではリンゴはだめという次第。規則は守らなければいけません。

このつまずきで台北駅での接続が悪くなり、下車駅「瑞芳」に着いたのは夕暮れも迫っていた。タクシーで「九份」まで行くと観光客相手の商店街はほとんど閉まっているし、雨も降ってそぞろ歩きはできなかった。

翌朝も雨。それでも「九份」の商店街を冷やかしてあるいた。路地が蛇行する屋根つきの商店街は、紅色の中華カラーが基調。ときおり中国人団体客がにぎやかに群れたり、台湾人の若者グループが行き交った。みやげもの屋を覗き歩くと、早くも出立の時になってしまった。

✿台湾の罰則や公共料金

帰国してから調べると2008年に検疫規則が改正となり、禁止、あるいは制限されている荷物は没収だけでなくその場で3000(1万円弱)～1万5000台湾元まで



罰金の払い込み用紙、もう一枚「行政院農業委員會動植物檢疫新竹分局裁處書」という書類ももらった。



坂の多い「九份」街並み

の罰金を徴収することになった。

台湾には2009年に制定した「煙害防止法」というものもある。ホテルやレストランなど公共の場所での喫煙を禁じる法律で、違反者には最高で罰金1万台湾元(約27,000円)。取締りには密告者からの通報も受け付けるというから、ちょっと怖い。密告が日常の蒋介石時代に逆戻りだ。

今回の旅行で我々が泊まった花蓮民宿の日本人オーナーは、煙草を吸うときは屋外軒下に椅子テーブルを置き、新聞を読みながら紫煙を吐いていた。これは自宅が公共の場所なので室内で喫煙できなくなった結果らしい。

別の町で入った小さな軽食堂の壁に、お役所配布と思われる「禁煙警告ポスター」が貼ってあった。しかし、ポスター下の床には吸殻があちこちに落ちていて、お客さんが吸うのは勝手に店は関せずというところか。私は煙草を吸わないので歓迎すべき規則だが、なかなか厳しい。ほかの店でも煙草の煙を浴びたので、この規則は完全に機能していないとの感じを持った。

歓迎すべき規則は、「敬老」料金だ。台湾の新幹線「高鐵」は65歳以上は外国人でも敬老料金適用で距離曜日に関係なく半額になる。国営の在来線「台鐵」もやはり半額だが外国人には適用されない。日本にはJRの敬老制度に「ジパング」という姑息な割引制度があり、年会費を

取って3割引、盆暮れは不可とお上感覚だ。すっきりと65歳以上半額になれば、旅行する人もずいぶん増えて、経済効果も広がると思う。高速道路無料化などより環境と人間に優しいはずだが、日本は65歳以上の人口が多すぎて割に合わないのか。私は65歳になっていないけれど、順調に齢を重ねたときのための遠吠えである。

✿三義木彫博物館

「九份」～「花蓮」と日程を消化して台湾の友人、「許」さんを訪ねて「台中」へ行った。台中では許さんの立案で苗栗県の「三義木彫博物館」に案内された。台中から車で30分ほどだ。この地方は日本統治時代は樟腦の精製地で、原始林のクスノキを伐採し尽くした。あとには大きな切り株がたくさん残った。この切り株にシロアリが巣くって面白い造形ができ、む、これはものになるぞとひらめいた人がいた。これが三義木彫のきっかけという。近年は先鋭造形家が作る芸術的にも優れたものができる、近くには木彫を職業とする人たちの一大芸術村が出現した。大通りには木彫屋が軒を並べ、独特の商店街を作っている。

台湾で起業をする人はここ三義で必ず縁起物(布袋とか竜、トラなど)の彫刻を買い込み、店や事務所に飾るそうだ。

1990年台湾政府が木彫産業振興のため設立したのが「三義木彫博物館」で、すばらしい木彫群が展示されている。入場料は大人80台湾元、ここでも65歳以上無料の「敬老制度」があり、65歳過ぎのAさんはパスポートを見せて無料となった。おもしろいのは身長が120cm以上ある子供の付帯規則で、学齢期前でも50台湾元を払わなければならない。私が思うに、うちの子はまだ学校に行っていないとシラをきる親に対抗した制度か？客車の通路に「背比べ」に使うような目盛りが刻んであり、これをオーバーすると学齢期前の子供も「小人」料金が適用される。似た制度はほかの国にもあるようだ。

日本でもこの制度に似たのを見たことがある。それはとある日帰り公衆温泉。脱衣場の入り口に身長を調べる

目盛りがあり、それを越えた男の子は母親と女湯に入れない。女の子は父親と男湯に入れない。無用のトラブルを避ける取り決めと思われる。

今回は、台湾のりもの印象ほかを予定。

(この項終わり)



三義木彫博物館(写真左)と、玄関にある「ゾウ像」(写真右)。加工無しの自然木というから驚き。この像は対になっていて、別の「ゾウ」が玄関の反対側にもある。

長沙市で山口さん(中国語講座元同学、長沙で日本語を教えている)と学生達に別れをつげ、山田さん(中国語講座同学)と共に長沙市の北西に位置する張家界に行きました。張家界は各種各様の奇岩が林立したところで有名です。長沙から飛行機便だと40分の距離です。張家界と鳳凰は苗族、土家族、白族など少数民族が多く住んでいる地域です。

張家界の飛行場に夜9時30分に降りて、まず驚いたのはタクシーが一台もないことでした。これは今までにない経験です。甘粛省蘭州の駅前で近距離のためすべてのタクシーに乗車拒否にあったことはありますが、タクシーが一台もないというこの未体験の事態にいささかとまどいました。

幸いマイクロバスが5台位いましたので頼んだところ、二台目でOKをもらいました。どうもホテルの送迎用のマイクロバスようです。想像通り予約したホテルとは別のホテルに着きました。このホテルの従業員からここのホテルに泊まるよう勧誘を受けました。

私たちは別のホテルを予約しているのでとりあえずタクシーを拾いましたが、このタクシーの運転手は運転しながら我々の予約したホテルをさんざんにけなし始めました。曰く「ホテルが古い、施設が悪い、景色が良くない、食事がまずい」等々です。自分の知っているホテルは安いし新しいし数段上だから、これから変更した方がよいというのです。このような運転手の態度には私は安徽省の黄山市で十二分に経験済みです。タクシーでの稼ぎは多くないし、ホテルの斡旋を副業としているのだと解釈しています。あまり相手にせず予約したホテルに行きました。確かに古いホテルですが、当初考えていたとおり川に面していて運転手の話とは逆に眺めは最高です。

さっそく翌日からの予定をホテルの旅行社と打ち合わせしました。(すでに夜の10時を過ぎていましたので、旅行社の担当者はいませんでした。部屋に荷物を運んでくれたホテルのボーイにチップ5元を渡して頼んだところ旅行社に電話してくれて担当者が夜11時にわざわざ出社してきてくれました)

張家界の観光地に一泊(実質まる二日)、山口さん推奨の、最近売り出し中で張家界からバスで4時間という千年の古都「鳳凰」に一泊(実質一日)という日程で中国人のバスツアーに参加することにしました。

張家界は前漢時代、劉邦の部下で謀臣であった「張良」^{注)}にちなんで付けられた名前、張良が身の危険を感じ当時の都から落ちのびて、ここに生涯身を潜め、ついには仙人になったと言い伝えられているところです。

いずれも700元と500元です(10,000円、7,000円位でしょうか)。交通費、宿泊代、三食、入場料、ガイド料すべて込みの料金です。

早朝に市内のホテルを早朝バスで出発し、張家界の入り

口に着きました。我々のグループは20名位で、老若男女入り交じっています。張家界観光地への入門で30分以上待たされました。他のグループの人達もいるので、はぐれないように、まず、ガイドと携帯電話番号を交換しておきます。次に、グループのメンバーのめばしい人数名の服装、顔を覚えておき、常に一緒に行動するように気を付けました。

入門料は高齢者については無料と聞いていましたが、外国人には適用しないと断られました。最近このように外国人適用外の取り扱いのところが増えていきます。第一日目は森林公園を徒歩で、小川沿いの遊歩道を7km程を3時間半位かけて、奇岩を下から見上げる形で歩きました。

当日のホテルは武陵源の町でした。夜は少数民族のショウがあるというので私ともう一組コニカの一眼レフをもった若い夫婦三人のみ希望して参加しました。思っていたより大きな会場で1,000人以上の観客が集まっていました。

近代化されたショウで見た目にはきらびやかですが、質素な民族独特の踊りを期待していた私の予想とは大きく外れました。舞台効果を高めるため下から煙を出したりして、写真すら満足に撮れません。翌日の出発は早いし、ショウが終わる前に引き上げました。

第二日目は袁家界風景区です。まず、エレベーターを乗



張家界森林公園の少数民族(苗族、土家族、白族)衣装の娘さんたちと



袁家界風景区の奇岩

り継ぎ高台にある遊歩道に行きます。ここからは昨日とは逆に、上からというか奇岩と同じ高さから見るようになります。下から見上げるよりも景色はすばらしいと思いました。観光の名所を巡る遊歩道を約1km位歩きました。さらに停留所に待たせてある専用バスで天子山自然保護区に行き3km位歩くというので、我々は近道をして次の移動のためのバスの停留所に先回りし、ラーメンを食べたり、お店の人やたまたまやってきた少数民族の元民謡歌手だという84歳の老人とおしゃべりを楽しんでいました。

私たちは夕方5時張家界市内発のバスで次の観光地「鳳凰」に行かねばなりません。張家界の日程が二日しかないと話すと、長沙の学生は「ブゴウ」(足りない)と言いました。張家界は広い観光地です。すべて見て回るには5日は必要でしょう。また夏期にはゴムボートでの溪流下りもあり、これが大きなセールスポイントともなっているのです。今回は残念ながら割愛せざるを得ませんでした。

夕方5時から4時間かけて南のほうにある鳳凰の町に到着しました。今回のメンバーは24人です。年寄りから若い人まで、また出身地も様々です。

ホテルに落ち着いたのは夜10時ころでしょうか、夜景がきれいだということで、私一人ホテルの従業員に道順を聞いて、写真を撮りに出掛けました。鳳凰は川沿いの古い町で、最近日本でもNHKで紹介されるなど観光地として有名になりつつあり、夜はネオンもまぶしく鮮やかな彩りを添えています。一時間くらい川沿いの両岸から写真を撮りました。対岸に移る際には橋というか石つたいに渡る感じで細心の注意が必要です。

翌日は千年の古都といわれる狭い昔のままの町の中を散策し、写真を撮りまくりました。大きな橋の上から見る町は千年の時空を超えてそのまま再現されているようです。この後郊外の古い都市を訪ねた後、苗族の部落に行き民族踊りを見学、更に、南の長城といわれる場所に行きました。が、時間切れで、私の最も興味のある南の長城は外側からのみの写真撮影で終わり、このツアーで最も期待していた長城の中を歩くことはできませんでした。団体旅行の最大の欠点は自分の興味のあるところに時間を掛けられないことです。

今回の旅行で意外に思ったことがあります。それはバスの中で中国人観光客が買い物などでもらったビニールの袋

を座っている前の座席の背もたれにつるし、ごみをすべてその中に入れて車内を汚さないように気をつけていることでした。また観光地ではごみ一つ落ちていません。公衆道徳やマナーが北京オリンピックを境にずいぶん改善されたように思われます。

昼食の時間が2時頃となりましたので、張家界行きのバスに乗り換えて張家界から20:00発の便で空路上海に行く予定にしました。

張家界に戻る途中のバスの中で私の携帯に張家界のガイドから電話がかかってきました。

「張家界の市内から空港まで送ってあげます」という内容で、随分親切だなと思いましたが、実は彼はまだ独身で自分の自由な時間が十分あるというような内容です。張家界に到着後、早速彼と一緒にレストランに行き三人で鍋を囲みました。

湖南省の食べ物はすべて辛いのですが四川省のようなピリ辛ではなくただ辛いだけです。しかしこのレストランで初めて辛くない料理を口にしました。ガイドは友人から借りてきたという車で我々を空港まで送ってくれました。車を降りるとき百円を渡しましたが、彼にとってはいい小遣い銭稼ぎにもなるのでしょうか。

上海では長沙から山口さんも加わり、それぞれに個人行動としました。私が唯一行ったのは上海101です。森ビルが建てたといわれる百一階の高層ビルで470mからの眺望を楽しみました。そして翌日14:05の上海紅橋空港から羽田に向け帰国の途につきました。

今回は学生達との交流や中国人団体旅行への参加などで、いつも一人で気ままな旅を楽しんでいる私は精神的に大変疲れましたが、強烈な印象を心に残す旅となりました。

ちやうりやう
注) 張良(～前168)：劉邦の謀臣となり、秦を滅ぼし、項羽を打ち破った漢の建国の功労者の一人、韓信、蕭何と共に漢の三傑といわれた。「鴻門の会」で劉邦の危機を救ったのは有名です。張良が死亡したのは、「背水の陣」や「韓信の股くぐり」などで有名な韓信が、呂后に謀反の嫌疑で誅殺される前なので、張良が張家界に身の危険を感じて逃れてきたというのは単なる架空の伝説かも知れません。



鳳凰の夜景



鳳凰独特の川に面した美しい街並み

カレンダーの写真もいっせいに春の絵になる三月です。首をちぢこませていた1, 2月には肩のあたりもカチコチで、早く春風にこわばりをほぐしてほしいな、と次の季節に想いをめぐらせていました。

でも、くしゃみと共に春は花粉のいたずらの季節でもあったことに気が付きます。

こわばりが弛み、むずむずすぐったいような。。春はそんなイメージがありますね。

今月の一枚は私の大好きな農民画の中の一枚です。「万物复苏」“森羅万象蘇る”訳すとそんな感じでしょうか。

しっぽの先を竹にダランと巻きつけているヘビはきっとまだ冬眠から起きぬけで、けだるい気分なのでしょう。生まれたてのオタマジャクシはおっかなびっくりチームで行動。

亀は首をストレッチ。気分一新、とつても姿勢の良いツバメ。Vサインのザリガニ。そして、画面いっぱいに霞か雲か白く小さなドットが点在しているあたり、ほんとにセンスが良い絵でしょう。



陳絹紅 「万物复苏」 金山農民画院

yú qíng cán xīn
松本杏花さんの俳句「余情残心」より

孫の手のあのねあのねと土筆摘む 早起のまず確かむる双葉かな

àisūn shǒu bù guāi
爱孙手不乖

rǎng zhe nà gè yào zhuā cǎi
嚷着”那个”要抓采

qīngqīng bǐtóu cài
青青笔头菜



zǎoqǐ bèn huātán
早起奔花坛

jíbùkědài xìchá guān
急不可待细察观

zǐyè chū liǎng piàn
子叶出两片

季语:笔头菜, 春. 笔头菜是由问荆的地下茎长出的孢子茎, 因形状像毛笔而得名、可食用。

赏析:爱孙会说话走路后, 手也闲不住了。小男孙大概都如此吧! 作者肯定对爱孙的成长满怀喜悦、尽管他时常闹人。

作者将爱孙的任性和瞬间动作描写得惟妙惟肖, 令人忍俊不禁。

赏析:此句具有浓厚的生活情趣。在花坛里埋上花种后, 便企盼种子快快发芽, 可能每天都要观察几遍吧! 这次早早起床, 直奔花坛, 一看, 竟露出了脱壳的两枚嫩小的叶片。一个新的生命诞生了! 作者对大自然的热爱由此可见一斑。



〈今年は寅年・陝北の「虎」の剪紙〉

中国の農民達が剪り出す剪紙に興味を持ち、長年、研究を続けてきた周路さん（現・安徽财经大学教授）とご一緒に中国陝西省の陝北地方を何回か訪ね、農作業の合間に剪紙を剪り、剪紙作家として知られた方達の家々を歴訪しました。

その中のお一人に、今は民間芸術作家としてゆるぎない地歩を固めていらっしゃる高鳳蓮さんもいます。高鳳蓮さんについては周路著「高鳳蓮」を会員の岩田温子さんが抄訳され「わんりい」紙上に掲載しましたので記憶に新しい方もいらっしゃるかと思います。

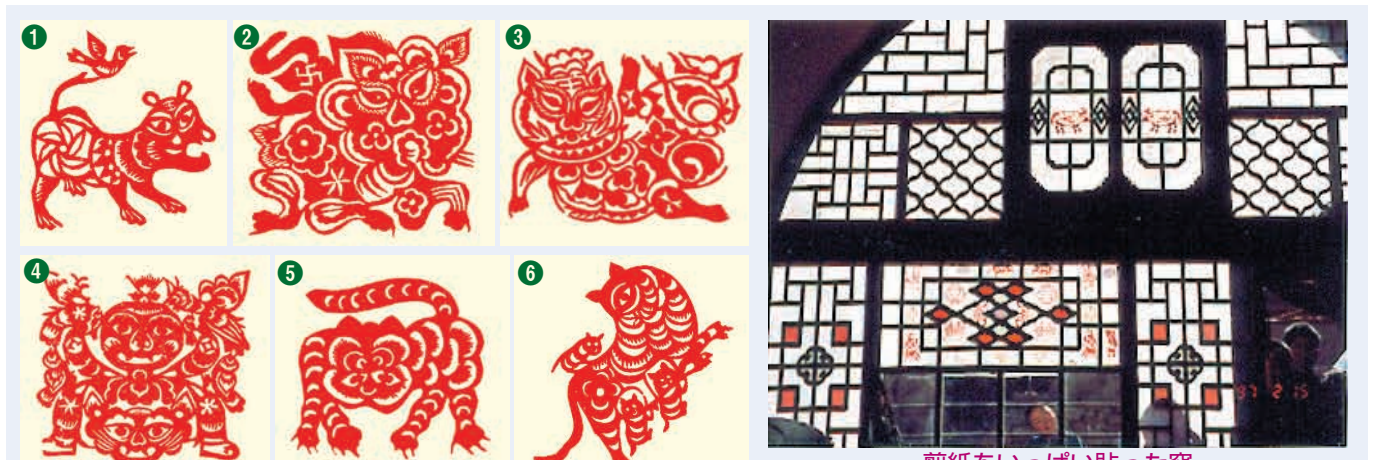
さて、陝北地方は、かつて中国史上で栄華を誇った長安（西安）のすぐ上に位置しながら、草も生えない、果てなく広がる黄土の地で、昔から中国でもっとも貧しい地域といわれています。科学的な知識を学ぶ場は少なく、健康を委

ねる医者の数も希少な中で、頼るのは昔から伝えられる迷信そのもののお呪いです。

そのような環境の中で、色とりどりの紙でその年の干支や魔除けを祈念し、或いは吉祥の意味づけをされた剪紙を剪り、南を向いた窑洞の、大きな障子窓いっぱいには貼ります。その障子は、内側から陽を透かすと素朴ながらまるでステンドグラスのように華やかで美しいものでした。

さて、今年は寅年。虎は地上を駆け巡るアジア大陸の王者です。病魔に犯されやすい子どもたちが強く立派に育って欲しい、そして自分の家を災害から守って欲しいと願いを込めてきっと陝北の黄土の村々の家の窓に、様々な虎の剪紙が貼られたことでしょう。

陝北地方の剪紙集から、高鳳蓮さんや他の作家の方の剪紙の虎を2、3ご覧ください。（田井光枝）



1 鳥尾虎 (佚名) 2 老虎 2 題 (高鳳蓮) 3 老虎 2 題 (高鳳蓮) 4 娃娃騎虎 (韩菊香) 5 花面虎 (白秀娥) 6 愛虎 (高金愛)

剪紙をいっぱい貼った窓

①鳥尾虎(佚名): 尾に小鳥を止ませたおしゃれな虎。②③老虎2題(高鳳蓮): 古くから伝わる図柄に囚われず自分のイメージで自由闊達に剪り、民間芸術研究者によって高い評価を得ています。図柄から飛び出してこちらに向かって来るような印象です。④娃娃騎虎(韩菊香): 韩菊香は髻を結んだ鬚抓娃娃(子どもの姿をした陝北地方の守り神)を剪るのが得意です。これは少し欲張りな剪紙で、虎の上にこの鬚抓娃娃がまたがっています。絵が小さいので分りにくいですが、娃娃の手には鶏がいます。鶏は中国語で、吉と同じ発音なので、お目出度い図柄と見なされています。魔除けのお呪いとして強力な効果を発揮しそうです。⑤花面虎(白秀娥) ⑥愛虎(高金愛): 母虎の愛情がいっぱい溢れ、自然に頬がゆるみますね。子沢山で、どの子も虎のようにたくましく元気に育って欲しいという祈りを感じる剪紙です。

♪ 3月の歌 tàiyáng chū lái xǐ yáng yáng 太阳 出来喜洋洋

tàiyáng chū lái luó ér
太阳 出来 (罗儿)
xǐ yáng yáng ōu láng luó
喜洋洋 (欧郎罗)
tiǎo qǐ biǎn dan láng láng chě guāng chě
挑起扁担 (郎郎扯光扯)
shàng shān gǎng ōu luó luó
上山岗 (欧罗罗)
shǒu lǐ ná qǐ luó ér
手里拿起 (罗儿)
kāi shān fú ōu láng luó
开山斧 (欧郎罗)
bù pà hǔ bào láng láng chě guāng chě
不怕虎豹 (郎郎扯光扯)
hé chái láng ōu luó luó
和豺狼 (欧罗罗)

xuán yán dǒu kǎn luó ér
悬岩陡坎 (罗儿)
bù xī hǎn ōu láng luó
不稀罕 (欧郎罗)
chàng qǐ gē ér láng láng chě guāng chě
唱起歌儿 (郎郎扯光扯)
máng kǎn chái ōu luó luó
忙坎柴 (欧罗罗)
zhǐ yào wǒ men luó ér
只要我们 (罗儿)
duō qín kuài ōu láng luó
多勤快 (欧郎罗)
bù chóu chī lái láng láng chě guāng chě
不愁吃来 (郎郎扯光扯)
bù chóu chuān ōu luó luó
不愁穿 (欧罗罗)

いつもの様にナイロビでの仕事を終えて、マタツという乗り合いバスに乗って40分。いつもの場所で降りて、いつもの様に自分の家までの道を歩いていた。

私がケニアで生活していた時に住んでいたのは、コンクリート2階建てアパート。その2階の端に私の部屋はあった。ナイロビ市内よりもっとケニアの普通の人が住む、外国人の居ない場所で、ファミリーで住んでいる人たちが多く、比較的安全という理由でこのmulolongo(ムロロンゴ)という新しく出来た町に住んでいた。家賃は月2000円、電気と水道は別料金。この辺りの相場は月500～1000円くらいですから、それと比べるとかなり高く、公務員や教師といった定職に就いている人が多く住んでいた。

ちなみに「ムロロンゴ」とは、「長い」という意味のスワヒリ語。何が長いかと言えば、ここは南アフリカからまっすぐに伸びる幹線道路がナイロビに向かって続いている場所で、そもそもは物流に携わる長距離ドライバーが休んでいく町として始まったとされている。トラックや車が、休憩する為に路上駐車している光景をよく見かける。その光景を人々が、「車の長い列」と言う意味で、「ムロロンゴ」と名づけたようだ。

ナイロビから車で40分ほど、空港までは20分という場所で、ナイロビで働く人たちのベッドタウンとして少しずつ栄えてきた町だ。多民族国家であるケニアを象徴するかの様に、いろいろな民族が集まり、小さな町となっていった。まさに、普通のケニア人が、普通に生活している場所だった。

そんないつもの道を歩いていると、私の住むアパートのすぐ横のお店に人だかりが出来ていた。近づいてみると、煙が立ち込め、反対側から火が出ている。「火事！」と人が叫んでいるものの、慌てている人がいない。私の部屋は賃貸とはいえ、貴重品などを部屋に置いてある。「誰か消防車を！電話した？」と周りの人に訊いてみる。1人、2人、3人と訊いてゆくが、誰も電話していない。「何で電話しないの？」と訊くと、「しても何時来るか分からないし、電話代が無駄」と言う。そして、みんな見ているだけの時間が続く。

そうこうしていると火はますます大きくなる。煙もすごい。私はもらい火を心配する。「消防車を呼んでないなら、みんなどうして消化活動

しないの？」

私は叫ぶ。

「燃えるものが無くなったら火は自然に消えるよ」「隣は、君が住んでいるアパートだけど、あそこはコンクリートだから燃え移らないよ。高さも違うし。隙間もあるし。ほら、風向きも違うだろう」

そしてよくよく眺めていると、燃えているお店から、家財道具が搬出されている。イスやテーブル、調理器具など。そしてすばやくトラックに積んでいる。やっぱりお店の人は、見ているだけではなかったのだ。

すると後ろから「泥棒！」と叫んでいる人がいる。燃え盛る店からモノを運んでいたのは、実はお店の人ではなくて泥棒なのだ。火事を偶然見つけた泥棒は、すぐさまトラックを横付けし、荷物を勇敢にも出して、積み込んでいく。それを知るケニア人は、大きな火事の時は、店から荷物を出さない。出しても泥棒に持っていかれるのが落ちなのだ。ならば、燃えてしまったほうがいいと、考えるのだろうか？

消防車も来ない、荷物を運び出す人も無く、運び出された荷物は泥棒に持って行かれてしまう。風向きや周りの建物の状況をよんで、自然に鎮火するのを待つ。火事で慌てているのはまさに、私だけなのだ。

正確な数は分からないが、救急車や消防車などの緊急車両は、各州に数台は配置されているそうだ。しかし2年ほどケニアにいたが、緊急車両が出動しているのを私は見たことがない。火事でも、泥棒でも、人々は「まず自分で何とかする」のが常のようだ。日本人の私はアフリカにいても「まず電話をして助けを呼ぶ」ことを考える。この精神構造の違いは大きい。だから目の前で何かが起こっても、私はすぐには行動できない。誰かがなんとかしてくれるのを待つてしまう。しかし、もともと何も呼んでなく、だからもちろん何も来るはずがない。

そういう緊急の場面で、ケニア人によく言われる。「何を待ってるの？」と。

火事の現場や、鞆をひったくられたり、交通事故の現場に遭遇したり、ナイロビ大学の学生デモに遭遇したり、車が故障したり、水が出なくなったり、いろいろな事故・事件に遭遇したが、誰も呼んでいないので、警察や救急車が来たり、助けてくれる人が何処からか

来るということはない。

それぞれの場面で、そこに居合わせた人が協力して、解決していく。もちろん泥棒も出るし、逆効果なことをする人も出てくる。しかしそこで見た人々の様子は、政府や人に頼らず、それぞれが持てる力を出し合って協力しようとする「自ら解決しようとする力」だと思う。

その地域の教会ではよくこんな張り紙をしてあった。「First Aid Learning Program」(応急処置訓練プログラム)。ケニア国内にある赤十字社が、応急処置の講師を派遣していて、いざと言うときの為の訓練をするというものだ。週末ごとに教会単位で行われていた。これは無料ではなく、200円ほどの受講料を払うのだがいつも定員が一杯だった。

私もキャンセル待ちのリストに名前を書いていたのだが、ある日の日曜日、訓練を受けることになった。老若男女の参加者10名。朝から夕方まで、応急処置の理論から実践まできっちり学ぶ。包帯の巻き方、人工呼吸の仕方、担架の運び方、止血の方法を実践しながら学んでいく。それぞれの段階で、テストがあって全員が出来ないと次に進めない。

私はどうしても人形を使った人工呼吸が出来なくて、何度息を吹きかけても人形のおなかは膨れなかった。すると先生は、「では、みなさんで彼女が人工呼吸が出来るよう教えてあげてください」といい、どこか

へ消えてしまった。そして参加者の10名がみんな、私1人の為に手取り足取り教えてくれた。その熱心なこと。10分ほどして、先生が現れ、「さあ、みなさんは上手に教えられましたか？」

そして私のテストが始まり、無事合格した。みんなも自分のことのように喜んでくれた。ケニア人は、個人主義のようにも見えるのだが、いざというときはこうして、協力するのである。

最後のテストは、実際の災害を想定し、怪我人と助ける人を分ける。時間内に怪我人を救出し、応急処置をするというものだ。みんな真剣そのもので取り組んでいた。一日の訓練は全員合格で終了した。終了証書を貰い、この地域に何かあったときは私たちが率先してやろうと、誓い合った。

私も何かを待つのはもう止めて、「まず自分でもやってみようとする」姿勢を見習いたいと思った。

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。3月いっぱい、おたより会費の納入をよろしくお願いいたします。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

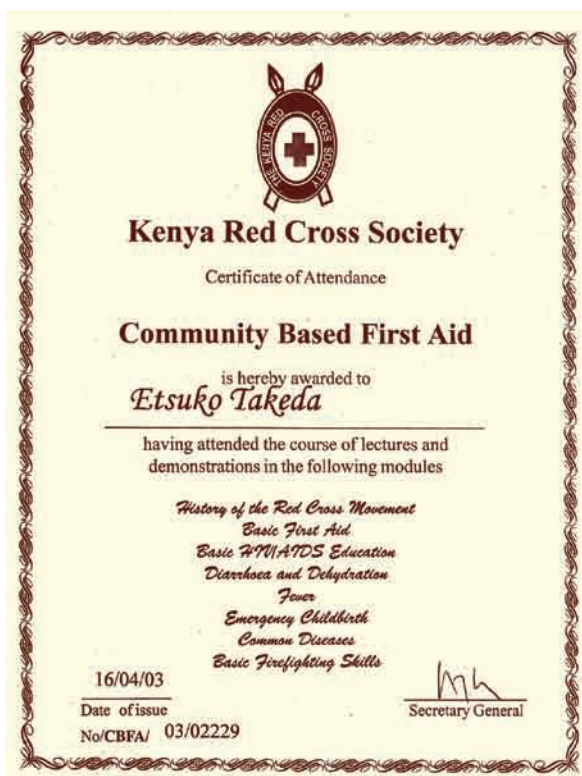
‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)



講習終了後に貰った証明書

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

前回では、LTTE キャンプで一夜を過ごした後、漸くジャフナに向けて出発できました。



ジャフナまでの道沿いで焼け落ちたり、LTTEの兵士が大勢居るのに驚いたりしているところで終わりました。

ジャフナ市内に入っても焼け落ちたり、弾痕の刻まれた壁やシャッターがそのまま放置された家屋が目につきました。政府軍の空爆で屋根に穴の開いたままの家も何軒もあります。

家屋は紛争の傷痕を残したままですが、街を行き交う人達からは少し前までは市街戦に怯えていたような気配は全く感じられません。街路樹はあおあおと繁っているし、ダメージを受けている家屋の生け垣や庭には様々な花が咲いていました。紛争の傷跡を残す家屋さえ見なければ、のどかな田舎町の光景です。

マーケットの周辺の道路では商品を満載したトラックや、二人乗りどころか三人乗りのオートバイが走り回り、マーケットの中ではトラックから降ろしたばかりの荷物を並べている店員と、商品を物色している買い物客でごったがえしていました。マーケットの中で会ったお土産物屋のご主人は、観光客を見つけると盛んに特産品のパルミラ椰子の繊維で編まれたカゴやアクセサリー等売り込もうと、大声で呼び込みをしています。カメラを向けると飛び切りの笑顔でポーズをとってくれました。

街を歩いていて気がついたのは、ジャフナがあるスリランカ北部地域以外の町では仏教寺院やキリスト教の教会、イスラム教寺院、ヒンドゥー寺院が共存していたのですが、スリランカ最北端(インドに最も近い)にあるジャフナではヒンドゥー寺院ばかりが目につきます。

仏教寺院等もきつと何処かにあるのでしょうか全く目に入ってきません。街中のいたるところで見られるヒン

ドゥー寺院の中でも、カンダスワミ寺院はスリランカ最大のヒンドゥー寺院で、紛争以前には7月から8月にかけて、スリランカ全土からヒンドゥー教徒が集まり街中を、山車を引き回す大祭で有名でした。

LTTE キャンプに思わぬことで一泊してしまい、ジャフナには来たものの今日中にコロンボに戻らなければなりません。昼過ぎには出発して、LTTE 支配地域を抜けて夕方5時までには反対側にある150km先のバンニのチェックポイントを通過しないと、またLTTE キャンプのお世話になる事になります。往路で楽しみ過ぎて遅刻の原因になった、ドブ Rok 屋さんは素通りしなくてはいけないのが心残りです。ジャフナ滞在時間は限られているので、ノンビリしている暇はありません。

先ず、ジャフナに駐留している政府軍幹部というカルナラトネ君の親戚に挨拶に行くことになりました。当初の計画ではジャフナに着いたら、この人に頼んで政府軍のキャンプに泊めて貰おうと考えていました。カルナラトネ君は親戚を探し出すのは簡単だと考えていたようですが、この親戚の居所がさっぱりわかりません。最初に行ったキャンプには居ません、聞いてみれば当たり前の話でジャフナ市内にはキャンプが数多く在るそうで、この事をカルナラトネ君は知らなかった様です。

幹部なんだから、キャンプではなくて政府軍本部に行けば直ぐに会えるだろうとチャミンドラ君が提案すると、カルナラトネ君は行くのを渋っています。どうやら、政府軍幹部というのは出まかせだった様で本当は一兵卒の様です。という事は、LTTE キャンプに泊まる様な事態にならずにジャフナに着いたとしても、親戚が見つからずに野宿をする事になった可能性が大だったようです。考えてみれば、連絡もしないで出かけて行って、政府軍キャンプに泊めて貰えると考えた時点から怪しい話で



ジャフナ市内。ジャフナ市内には緑が多く残されていました。商店にも活気があり多くの買い物客がいました。写真中央のターバンを巻いた男性を見るとインドにきたようです。



お土産物の御主人。ジャフナの特産品であるパルミラ椰子の繊維で編んだ籠と、元気な店主。カメラを向けると飛び切りの笑顔でポーズをとってくれた。

した。まあ、スリランカではよくある話といえばそれまでですが、それを信じた僕が甘かったという事です。

政府軍の幹部(?)を捜している時間的余裕はないので挨拶は諦めて、どうせ相手は僕達が来ている事は知らないのだからもともと挨拶に行く必要はないのですが、ジャフナのシンボルであるフォート(砦)に行きました。

フォートは1680年にオランダによって建設された要塞で、函館の五稜郭と同じく星型をしています。紛争前には観光客が必ず訪れる場所でした。残念ながら僕達が行った時には、フォート内部は地雷除去が全くされていない為に、危険で中に入る事が出来ませんでした。同じ様なフォートがスリランカ南部のゴールにもあり、こ

ちらは世界遺産に指定されています。2004年のスマトラ沖大地震の際にはゴールでも大勢の犠牲者がいましたが、フォート内部では殆ど被害はありませんでした。紛争が無ければここも世界遺産になっていた事でしょう。

フォートの後にはジャフナ国立大学に行ってみました。学生の姿は殆ど見ることは出来ませんでした。マーケットを覗いたりしている間に、時間はドンドン過ぎて出発しなくてはいけない時間は直ぐにやってきました。

帰路は、何処にも立ち寄らずにカルナラトネ君達と運転を交代しながらバンニのチェックポイント目指してフルスピードで一目散に退散です。門限まで30分ほどの余裕を持ってバンニに到着する事ができました。(完結)

私の四川省一人旅 [33] 亜丁Ⅸ・二度目の亜丁 14

田井 元子

亜丁村でタクシーを降りた私が宿泊を決めたのは、宿屋というよりは民宿だった。ダブルサイズの寝台の幅にベニヤ板の壁で仕切られただけの窓の無い部屋は、これまで亜丁で泊まって来た宿に比べればはるかに上等で、安全に眠る事が出来さえすれば満足の私には充分だ。部屋に荷物を置いた私は再び外に飛び出した。完全に日が暮れないうちに、さっき眺めた魅力的な亜丁の村を歩いてみたかった。

三年前、亜丁への立ち去り難い気持ちを胸に抱えてバスの窓から名残り惜しく眺めていた中国の山奥の小さな小さなこの村に、自分が一人で訪れる日が来るなど思いもしなかった。

二度目の亜丁に到着したその日、道端で信じられないような再会を果たしたあの少年もこの村の住人だ。この土地を去る前に是非もう一度会いたかったが、こんな小さな村の事だ。きっと彼のことは簡単に見つけられるだろう。

あたりには紫色の薄闇がひろがり始めていた。先ほどまで村人や子供たちで活気づいていた村は人影も少なくなり、立ち並ぶ家の窓からは小さな明かりがもれているのが見えていた。亜丁村はほんの小さな村だ。村の中ほどにある宿からほんの5、6分程も歩けば村のはずれまで出てしまう。今日一日の登山の疲れもあり夕暮れの村のただすまいにちょっとセンチメンタルな気持ちになっていると、村はずれの一軒の家から素朴な村の雰囲気には場違いな感じのする大音量で音楽が漏れていた。

なんだろう・・・お店かな？

興味を引かれてその家に向かって歩いてゆくと、家の前に立っている少年がこちらに向かってさかんに手を振っているが見えた。

私に手を振ってるの?・・・お店の呼び込み？

引き寄せられるように近づいてゆくと、薄闇の向こうに私が再会を熱望していた亜丁の少年が笑みを浮かべて手を振りながら立っていた。

ええ～!! あなただったのお～!?

全身の力が抜けた。この村で彼を探すのを宝探しの楽しみのように感じていた私だったが、こちらが探そうともしないうちに、会えてしまうなんて。先ほど私が亜丁の村に足を着けてから、まだ数分しか経っていない。

自分の村に突然フラリと現れた私をみても少年は驚いたそぶりもなく、まるでこの日に会うことを約束していたように「待ってたよ～」と笑顔で私を迎えてくれた。

「ここが僕の家なんだ! さあ入って、入って!」

少年に招き入れられた家の中は広い土間の部屋になっており、大きなステレオが置かれて音楽が鳴っていた。壁には幼稚園の誕生会を思い出させるキラキラしたモールが巻きつけられ、土間の片端にはテーブルとソファが並べられて、テーブルの上にはビールの瓶がたくさん置かれていた。家族の生活スペースはもっと奥にあるようだ。

「君はとっってもいい時に来たよ! 今日はこれからパーティなんだ。今から村中の仲間たちがやって来るんだよ」

訳がわからないまま私は勧められたソファに座り、テーブルの上にたくさん用意されていた紙コップに彼がビールを注いでくれた。お酒はあまり飲めないと告げた私に「じゃあ、少しだけ」と彼が注いでくれたビールの泡を舐めながら、私は自分の置かれた状況について行かれずぼっとしてしまった。

今日の成り行きでほんの先ほど亜丁村に着いたばかりだというのに、再び会えるかどうかも判らなかった彼の家のソファに今並んで座っているなんて! そもそも彼と私は何故毎回こうも簡単に出会ってしまうの? 思わず何か不思議な縁で繋がっているんじゃないかと思ってしまう。そういえば初めて少年と出会ったあの時も、小屋の前で手を振る彼に招かれて、彼の小屋を訪れたのが始まりだったのだ。

「今日は何のパーティ?」

「明々後日にはまた成都に戻るんだ。そのお別れパーティだよ。俺が村中の奴らを招待したのさ。もうすぐみんなやって来るよ」

彼の言葉通り、しばらくすると村の若者達が徐々に集まってきた。彼は次々にやってくる友達に私を紹介してくれた。

「彼女は日本人の友達だよ。三年前に会ったんだ」

紹介された彼の友人と話しているうちに、いつの間にか広い土間がいっぱいになるほど若者達が集まっていた。まだ10歳程に見える幼い子供から青年までが並べられたソファにぎっしりと腰掛け、友人の接待に動き回る彼の周りに集まっていた。本当に村中の子供たちが全員集まっているようだ。彼の人気の程が伺われた。

私の斜め前に座っていた、どこか昔の彼を思わせるちょっとぶり粋がった雰囲気の子は、隣に少年が来ると年上の彼の首に手を回し、身体をぴったりと寄せ合って睦まじく何かを話していた。見るからに仲が良さそうだ。まるで兄弟のように見えた。この村で育った者同士は本当に兄弟のようなものなのだろう。きっと彼の事が大好きなんだろうな。憧れの兄貴分のような存在なのかもしれない。

部屋がいっぱいになるほどお客が集まった頃、少年が土間の真ん中に進み出て挨拶するとパーティが始まった。

「みんな、今日は集まってくれてありがとう。存分に楽しんでいってくれよな!!」

たぶんそんな事を言ったに違いないその後、少年が何か声を上げると途端にそれまで椅子に座ったり部屋の壁にもたれていた村人達が子供も大人も土間の中央に走り出て、少年を先頭に一列に並ぶと輪を描きながら踊りが始まった。みんなが声を揃えて歌うチベット族の歌が響きわたり、そろって頭上で腕を回し足を蹴り上げ、身体を回転させる躍動的なチベット族の踊りだ。

この踊りによく似た物を、この四川省の旅で登山メンバーと別れる前に、皆で訪れた丹巴という村で見た事があった。丹巴は四川省チベット圏の村の中でもことに風光明媚な土地で、民家と自然が美しく調和した絵本の挿絵そのままのような風景には誰もが目を奪われてしまう。その美しさから旅行者も多く訪れる土地柄故、訪れた旅行者に土地の文化や踊りを見せてくれるような場所があったのだ。

あの時の踊りは私達に見せる為の催しだったが、今、私の目の前で言われているのは彼らが自分たちのために踊っている正真正銘の本物だ。歌声につられた様に小走りに家の中に入ってきて、踊りの輪に加わる者もいた。みんな弾けるような笑顔を浮かべている。歌声はますます高くなり、踊りのスピードは増していく。

すごい!! なんて素敵なの・・・!!

大人も子供も一緒になって楽しそうな彼らの様子を見れば、踊りは教えられたものではなく、この村で育ったものなら誰でも普通に踊るようになるのだろうと思われた。きっと何か楽しい事がある度に、折に触れて踊られているのだろう。そんな生活に根ざした喜びや楽しさが力強く発散されている彼らの踊りには民族の誇りさえ感じられた。生活の中に自然にそんな文化を持つ彼らが羨ましく思えた。これが見られただけでも、今日此処に来て本当に良かった～・・・

た～・・・

踊りの輪の先頭に立って皆をリードしている垂丁の少年はひととき踊りが上手い。まるで光の粒が彼の周りを縁取っているように彼の姿が輝いて見えた。思わずぼーっと彼の姿を追いかける私の目の中には、きっとその時ハートが浮かんでいたに違いない。

彼らの民族の踊りの後は、流行の曲に合わせた今風のダンスになり、次は有志が代わる代わる前に出てきてアカペラで歌うカラオケ大会(?)が始まった。まずは最初に一曲、少年が私も知っている香港歌手の中国語の大ヒット曲を歌った。彼はダンスも歌の腕前もピカイチだ。何をやっても様になる村一番の人気者といった雰囲気だ。

その後は少年がカラオケ大会の司会と進行役を務め、楽しいコメントを挟みながら友人の歌を紹介していたが、最初のうちは次々と名乗りを上げていた歌手が一通り出揃うと積極的に前に出るものがいなくなり、困った進行役の彼に指名された女の子が恥ずかしがって会場から逃げ去ったところで終了した。

歌が終わってからは歓談タイムだ。少年は集まっている友達の間を忙しく動き回りながらも私に気を使い、皆に紹介したりなるべくそばに居ようとしてくれていた。

そんな時、やはり垂丁村に宿をとっているらしい旅行者が、私と同じように外に漏れている音楽に惹かれ、何をやっているのかと家の中を覗き込んでいる姿を見つけた少年は、すかさず彼ら呼び込んだ。

「入って! 入って! 遠慮はいらないよ! 今日はパーティだから一緒に楽しんでよ!」

呼び込まれたのはおじさん、おばさんと呼ぶには少し年若いくらいの中国人旅行者の男女だ。家に招き入れられたものの戸惑っている二人に少年はソファに座るように勧め、出されたビールを断ろうとした彼らに言った。

「いいから、いいから! お金なんか要らないよ。僕らと一緒に楽しんで!」

そんな少年の姿に、私は三年前に始めて出会った時の彼をダブらせていた。やっぱり彼はそうなんだ・・・。あの日、まだ子供だった彼が、おばさんの集まりであった私達のグループを懸命にもてなしてくれようとする姿に、チベット族は子供の時からしっかりしてると感心していた私だったが、それは少し違っていた。「チベット族が・・・」ではなくて、きっと彼が特別なのだ。相手の年齢や性別を問わず訪れる者をもてなそうという彼のホスピタリティは、この日再会してからの短い時間の間にも端々に感じられ、そんな少年の姿が私は嬉しかった。

今回垂丁を訪れた日から今日まで、私が出会った村人達の殆どは、観光客から少しでも多くのお金を取ることにしか考えていない様に思われた。自然の美しさは私を裏切らなかつたが、村人達との触れ合いをも求めてこの土地を訪れていた私は、その事に深い失望を感じていたのだ。

この土地が一般に開放される以前はおそらく殆ど現金収入を得る糧も無く、農業や山仕事、牧畜などで細々と暮らしてきたのだろうと想像される村に、ある時から突然観光客が訪れるようになり、ささやかな労働と引き換えに大量の現金が村に流れ込むようになったのだ。そんな環境の激変により、村人達の意識が、変わってしまったのだとしても一概に彼らを責める事はできないが、やはり深い愛着を感じているこの土地で、他所から訪れた人間は単なる金づるとしか思っていないような村人に対峙する度、私とはとても悲しかった。

心から再会を喜んだ懐かしい少年も、改めて会ってみればそんな村人達と変わらないのかもしれない・・・長い間心の中で暖めてきた彼の印象が壊されてしまう事に、どこか再び彼に会う事を恐れる感情も抱いていたのだが、こうして実際会ってみれば、私の思い描いていた少年のイメージは少しも壊れていない。汚れた登山服を着て歳の離れた外国人の私を、自分の友人として大切に扱ってくれる彼に心が温まる思いがしていた。

私がそんな事を思っている時、奥の部屋からノソソリと背の高い強面の男の人が出てくるのを見た少年は、慌てて手に持っていたタバコを後ろ手に隠して私の耳に囁いた。

「一番上の兄貴だよ。兄貴の前じゃタバコなんて吸えないよ」

「だってあなた、三年前から普通に吸ってたじゃない」

彼はやんちゃな笑顔を浮かべて言った。

「俺、兄貴だけは怖いんだ」

先ほどの中国人の女性が少年に尋ねた。

「成都の生活はどう？」

「う～ん、あんまり好きじゃない」

18歳という遊びたい盛りの少年にとって、都会は刺激的で魅力にあふれる場所なのではないのだろうか？

「学校を卒業したらどうするの？」

「たぶんここに戻ってくるよ」

「まあ!! 成都で学んでからまた此処に戻るの!？」

思わず呆れ声をあげた女性の言いたい事は私にも解った。

こんな山奥の狭い村にいても彼の人生は閉ざされたままだろう。せつかく都会に出て学ぶチャンスを得られたのであれば、広い世界で自分の人生を切り開いて行くべきで、そうでなければ勿体無い。だけど・・・本当にそうなのだろうか？ 彼がこの土地を愛しているのなら・・・物質的に豊かな生活や人生の成功者になる野心よりも、美しい自然に恵まれた故郷で親しい隣人や家族に囲まれ、穏やかに楽しく自分の民族の文化や風習に即した生活を望むのであれば、それはそれで良いのではないのだろうか？

豊かさや発展を望んで走り続けてきた現代の日本のありようを思いおこせば、幸せのあり方は繁栄の中にだけあるものではないのだとも思えた。そんな事よりも単なる旅行

者のセンチメンタリズムからいえば、彼には都会の色に染まらずにいつまでも垂丁の少年で居て欲しいような気がしているだけなのだが・・・。

夏休みで垂丁に戻っているとの話だったが、詳しく聞けば彼は体調を崩して咳が止まらず6月頃から村に戻っていたのだそうだ。

「あなたに都会の空気は合わないのね」

私の言葉に彼は深く頷いた。

中国人旅行者達はしばらく歓談した後にお礼を言って立ち去り、いつしか夜も更けていた。

「疲れた？ もう帰りたい？」

少年が私の顔を覗き込んで言った。

そういえば今朝は朝の4時からバタバタした上に、サリ一達と霧雨の中を宝石の湖まで登山してから垂丁村までやって来たのだ。少年と再会できた嬉しさに疲れなど忘れていたが、さすがにグッタリした顔をしていたらしい。

「うん、そろそろ宿に帰る」

「送っていくよ。ちょっと待ってて」

え？ 送って行くって言ったって、徒歩でせいぜい5、6分なんだけど・・・暫くどこかに姿を消していた少年が家の外から私を呼んでいた。

「準備できたよ！」

表に出るといつの間にか雨が降り始めていた。少年は納屋から引き出してきた小型のバイクに跨り、私に後ろに乗るように言った。

ええ～!! 歩いて5、6分の場所にバイクで行くの～!?

思わず苦笑してしまったが、嬉しかった。人一倍強く逞しい女である私は、男性に送って貰った経験など殆どないし、親子ほど歳が離れているといったって、好きな男の子の運転するバイクと一緒に乗れるのだ。三年間忘れることの無かった思い出の少年と劇的な再会を果たし、今日また仕組まれていたのかと思えるほど偶然の出会いをした二人が、雨の降りしきる暗闇の中をバイク二人乗りで走るなんて、なんてロマンティックな～・・・!!

これで少年と一緒に三度目のロマンティックだ。彼に会うと何故いつもこんな素敵な思いをさせて貰えるんだろう。ふと現実に戻って自らを省みれば、自分の事がちょっと恨めしい。こんなに素敵な状況なのに、なぜ私ときたら泥だらけの登山服を着た年増女なんだろう。せめて二十歳の少女なら素敵なロマンスが生まれていたらっておかしくないのに～!! 私が内心そんな事を思っているとはつゆ知らずに少年は言った。

「大丈夫？ 落ちないように僕の身体に捕まって」

私はバイクに跨ると彼の胴に腕をまわし、背中に頭を持たせかけた。顔に降りかかる雨などちっとも気にならない。このまま何処までも走って行けたら良いのに・・・

しかし徒歩5、6分の場所にある宿に、バイクは1分もかからずに到着したのだった。 (次号に続く)

【活動報告】 楽しかった新年

2010年1月31日 於：麻生市民館・料理室

恒例の“わんりい”新年会が、1月31日、麻生市民館の調理室で開催されました。

9時、手分けして準備開始。男性陣も特製シュワンヤンロウのタレ作り参加で、定刻の11時までには調理台の上に色とりどりの材料が積み上げられ、お鍋のスープも沸騰し始めすっかり準備が整いました。

参加者が揃ったところで井田さんの挨拶で新年会開始。続いて“わんりい”関係者の紹介ということで、「媛嬢講故事」(“わんりい”連載中)でお馴染みの何媛嬢さん

とご夫君の韓シンさん(国士舘大学国際交流室勤務)、日本と中国で活躍のオペラ歌手の崔宗宝さん、馬頭琴奏者のチ・ブルグッドさん、京劇俳優の張紹成さん、“わんりい”常設の講座「中国語で歌おう!会」ご指導の趙鳳英さんとご夫君の呉万新さん(作曲家、今年4月より「四川音楽学院」の教授)、水墨画家の満柏

さん(あいうえお順)、他町田周辺で国際支援や友好活動団体の面々など、今年も多士済々、“わんりい”の広がり大きさを実感しました。

11:30、いよいよ参加者お待ちかねの羊肉のしゃぶしゃぶ・シュワンヤンロウです。超薄切り羊肉が11kgを越えて用意され、ぐつぐつというスープに潜らせては、アツアツを一所懸命に頂きました。箸を運びながら久し振りに会う友人知人との会話も楽しみ、正に口福のひと時で体中がほっこりと温まって来ます。

1時間余り鍋に専念しておなかも満腹、お箸の動きが鈍った所で余興タイム開始です。

まずは本場・内外のモンゴル地域でも評価を受けている、東京万馬・馬頭琴アンサンブルの永瀬さんと池谷さんが軽快で明るい馬頭琴の演奏曲を2曲。続いてオペラ歌手の崔宗宝さんが、ご持参のテープを伴奏に、バリトンの、すばらしい声量でしっかりとアヴェ・マリア(ジュリオ・カッチーニ作曲)を熱唱した後、「馬頭琴の音色に刺激を受けました」と、ブルグッドさんに馬頭琴での伴奏をリクエストし、モンゴル民謡「牧歌」を歌っていただきました。一瞬、会場はモンゴル草原の広がりの中に飛び出したようでしたが、続いて歌

ってくださったのはカンツォーネ「フニクリ・フニクラ」。気分は一気に海を越えイタリアンモードに。

「モンゴルの民謡は好きで良く歌うけれど、生の馬頭琴の伴奏で歌ったのは初めてです」。歌い終わった崔さんが言われました。このような思い掛けないコラボレーションが自然に実現するのも、人の心を開かせるシュワンヤンロウ鍋の効果と“わんりい”のこれまでの活動の成果でしょうか。

そして今度は、崔さんの歌の伴奏で馬頭琴を手にしていたブルグッドさんが、会場の期待に応じて「僕も一曲演奏するよ」と、ご自身作曲の「砂の記憶」を心を込めて演奏くださいました。

5、6年ほど前、やはり“わんりい”の新年会で「今、作曲中の曲だけ…」と、その時も馬頭琴教室の生徒さんの馬頭琴でこの曲を演奏くださったのを思い出します。馬頭琴演奏の高度なテクニックを要する曲でその時もとても感動したのですが、更に曲と演奏に磨き



ブルグッドさんと池谷さんの馬頭琴の伴奏で「ふるさと」を歌う

がかかり、馬頭琴の音色が心のひだの隅々まで染みとおりました。

余興タイムと紹介しましたが、それぞれに心のこもった本格的な歌と調べは、余興というには申し訳ないハイレベルなもので、参加者は口福に加えて耳福を味わいました。

さて余興の最後は、趙鳳英先生の指導の「中国語で歌おう!会」の皆さんによる文部省唱歌「故郷」を中国語の歌詞での合唱です。2回歌い、1回目は会の皆さんだけで、2回目は配られた中国語の歌詞を馴染みのメロデーに乗せて、参加者全員で大きな声で歌いました。

新年会の締めくくりは、恒例のビンゴと福引。毎年の事ながら、思いがけない品物に楽しいコメント、自分自身で密かに今年の運勢を占ったりします。今年は、ビンゴの景品も沢山並べられて、早々ビンゴになった人が選択に迷う姿も見られました。

次から次へと楽しいことが目白押し3時間半でした。「又来年もお会いしましょう」と再会を約束して新年会は無事終了。きっと今年もいい年になると予感できた新年会でした。

(報告：有為楠)

【活動報告】

‘わんりい’春節ミニコンサートに参加して
2010年2月14日 於：野津田の隠れ里・乃平庵

2月14日といえばバレンタインデーですが、今年是中国のお正月である春節の元日にも当たります。私たちコンサートの参加者20名は、この日にふさわしい雅なひとときを、中国の演奏家・銭騰浩さんと馬平さんのお二人とともに過ごしました。場所は町田野津田の隠れ里「乃平庵」。

ミニコンサートとはいっても、まずは演奏家と語らいながらのランチ(ケーキ&コーヒー付)、新しい企画の盛り込まれた演奏プログラム、乃平庵のすてきな落ち着いた部屋空間、そしてガラス戸の外に広がる自然空間という幾重にも観客を非日常へと誘ってくれるなかなかのコンサートでした。内容の充実魅了され、今だ余韻に浸っています。

さて、このコンサートはお洒落な中国服をまとった男性二人、銭騰浩さん(笙)と馬平さん(中国木琴を含む打楽器)の共演に始まりました。続いて銭さんが、笙は楽器本体の下部にお湯を入れ体温と同じ位にしてから吹かないとリードが結露して音が出ないこと、笙で笛のように音を転がす場合は高音でやると対応できることなどを説明。また、演目の「草原騎兵」の情景と音との関係を部分部分に分けて話して下さいました。コンサート参加者の頭の中には、より鮮やかに生き生きと大草原の風景や人馬が遠くに近くによぎったことと思います。意外なことに笙をはじめ木管楽器は体力を使うようで、熱演の銭さんは汗びっしょりでセーターを脱ぎに一時退場。

後を馬さんにゆだねるも、すぐに再登場した銭さんは特有の楽しいおしゃべりでコンサートを盛り上げ、馬さん演奏後もソロで格調高く心情のこもった音色を聞かせてくださいました。

引き継いだ馬さんも中国木琴について説明。中国木琴はロシアから伝わったこと、父上も木琴奏者だったこと、木琴の下部にあるパイプがないと響かないこと、木琴は黒檀でバチにはすべらないように皮が貼ってあること等々。そして馬さんの大きな体が打ち出す木琴の力強い響きや哀愁を帯びた響きにうっとりでした。

次にきょうのメインイベントともいえる、笙と打楽器をバックに吟じられる漢詩。彼らの背後には冬枯れの木々が風にゆれ、紅梅が咲き、時たま小鳥が飛び交う中、楽器と詩の響きがこちよく耳に入りました。全てが溶け合い、だれもが忘我の境地であったと思います。

演奏の締めはお二人の即興で静から動そして静へと見事な掛け合いで、演奏が終わっても一同しばらくシーンという放心状態でした。そして盛大な拍手のうちにコンサートは終了しました。

きょうのひとつときは味覚、聴覚、視覚を満足させ、思い出深い一日となりました。演奏の方々、企画された方々、そして貴重な空間を提供していただいた乃平庵に心より感謝いたします。
(佐々木真理子)



雑木林を背景に演奏の、銭さん(笙)と馬さん(中国木琴)



様々な打楽器で演奏に効果を添える

夢幻のジョイントコンサート

北京3泊4日ツアー(募集:200名)

案内板(p20)紹介のツアー日程表

- 1日目** 成田or羽田発 13:50 ~ 19:30
北京着 16:50 ~ 22:55 北京泊
食事 機内食
- 2日目** 北京滞在 ①北京郊外観光 or ②天津観光
食事 朝・昼・夕
- ①世界遺産・万里の長城(八達嶺)/世界遺産・明の十三陵/世界遺産・頤和園/北京オリンピックスタジアム(鳥の巣)/ウォーターキューブ(水立方)/ショッピング等
- ②租界時代の洋館の街並みが残る天津観光
古文化街/天后宮/南市食品街/水上公園/周恩来記念館/ショッピング等
(参加は:2,000円UP)
- 3日目** 北京滞在 食事 朝・昼・夕
北京市内観光:天安門広場/世界遺産・故宮博物院&天壇公園、昼食(刀削麺料理)、中国茶芸体験
夜、国家大劇院にてジョイントコンサートに参加
- 4日目** 空路帰国の途へ 食事 機内食
- 北京発 08:25 ~ 11:15
成田 or 羽田着 12:50 ~ 15:30

お疲れ様でした

麻布演劇市・京劇研究会「東京的京劇」第17回公演

京劇ミニレクチャー又は対談 付き
麻布区民センター・ホール 港区六本木5-16-45

中国伝統劇「拾玉鐲」&
京劇的教育劇「イエスマン・ノーマン」B・プレイト作

3月12日(金) 18:30 ~ 附 京劇ミニレクチャー
3月13日(土) 13:30 ~ 附 対談
18:30 ~ 附 京劇ミニレクチャー
3月14日(日) 13:30 ~ 附 対談

▲京劇ミニレクチャー「京劇の約束事について」
講師：波多野 真矢(東京大学専任講師)

▲対談「京劇と西洋演劇の対比」

岩淵 達治(元学習院大学教授) × 加藤 徹(明治大学教授)

※開場は開演の30分前

※港区在住・在勤・在学者、友の会会員は13日(土)昼夜無料

参加費：前売 2,000円(当日2,500円) 全席自由席

主催&企画：京劇研究会

問合せ：☎ 090(3314)4697(担当：黒木)

FAX 044-977-5875(京劇研究会)



日本と中国オペラ会の2大スターの歌声が心に響く

ソプラノ/森麻季(日本)& テノール/戴玉強(中国)

夢幻のジョイントコンサート付き

北京3泊4日ツアー

●日程：2010年10月7日(木)～10月10日(日)

●参加費：成田発88,800円 羽田発：98,800円
(北京飯店3泊室料 6回の食事、5つの世界遺産観光
及びコンサートチケット)

●ゲスト：崔宗順(バス/米国在住)
崔宗宝(バリトン/日本在住)
川井綾子(ピアノ)

主催：中国国家大劇院(北京)

企画：崔宗宝音楽事務所

申込&問合せ：(株)HIS 045-317-3631(川上/内海)
日程など、'わんりい' 19ページをご覧ください

馬頭琴演奏会 新着情報2題

①. チ・ブルグド & TOKYO万馬-馬頭琴アンサンブル
2010年4月18日(日) 19:00開演(16:30開場)

目黒パーシモン・小ホール(200席)

東急東横線「都立大学駅」下車、徒歩8分

●チケット：3000円

問合せ：☎ 090-6036-4820(永瀬)

「チ・ブルグド& TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル」
は、5月上旬、モンゴル国の首都ウランバートル市で開
催の「国際馬頭琴フェスティバル」に参加・出演を予定し
ています。

②. チ・ブルグド & MIHO / 馬頭琴コンサート
2010年4月24日(土) (詳細4月号で)

千葉市美浜文化ホール(152席)

〒261-0011 千葉市美浜区真砂5152

JR京葉線検見川浜駅下車徒歩8分

ガイドウォーク

崔宗宝ミニコンサート in 可喜庵

2010年4月24日(土)

花の寺(高蔵寺)を中心に三輪地区ガイドウォークと
のコラボレーション。下記3コース(各コース30名
限定)より好きなコースを選択下さい。

①鶴川駅前9:30 発 ●参加費：2,000円

鶴見川散策～熊野神社～石楠花の寺(高蔵寺)～白坂横穴
墓群～稲山神社～妙福寺～沢谷戸自然公園(昼食)⇒可喜
庵 13:00着 ■ミニコンサートin 可喜庵 13:00～

②鶴川駅前10:00 発 ●参加費：2,000円

梶家の大板碑～岡上神社～熊野神社～石楠花の寺(高蔵
寺)～沢谷戸自然公園(昼食)～白坂横穴墓群⇒可喜庵
14:15着 ■ミニコンサートin 可喜庵 14:15～

③コンサートのみ ●参加費：1,300円

■可喜庵集合 15:30 15:45～

◆コンサートプログラム(予定)

平城山、初恋、千の風になって、草原情歌、万里の長城、他

◆崔宗宝：オペラ歌手(バリトン)92年来日。東京芸大
修士課程終了。日本各地で精力的な活動を続け、伸び
やかな美声で多くのファンの心をつかんでいる。

*可喜庵：江戸時代末期に建てられた古民家のサロン

町田市能ヶ谷町740

*コース①と②は、保険代、昼食弁当代、コンサート参加費、
資料代を含みます。③はコンサート参加費のみです。

*それぞれのコンサートは、約30分の予定です。

◎申込み&問合せ：

(社)町田市観光コンベンション協会

☎042-724-1951 FAX042-724-1952

その道のプロに教わる

美味しい手作りクッキーとチョコの会(昼食付)

2010年4月17日(土) 10:00～14:00

三輪センター(小田急線・鶴川駅バス)

*参加の方には鶴川発のバスの時刻をお知らせします)

定員：先着12名('わんりい'会員と関係者のみ)

'わんりい'の催しの折に、いつも感動的に美味しいクッ
キーや生チョコ風味のチョコを差し入れてくださる、会員
の足立晃一さんは、長年、洋菓子に携わるお仕事を経て
来られました。'わんりい'メンバーの強い希望で、はるばる
茨城県銚田市よりプロの味をご指導にお出で下さいませ。

お昼は、クッキーとチョコの味を損なわないように、アフ
リカンコネクションの竹田さんとガスパレイさんに教えて
頂いたケニア風・野菜たっぷり牛肉のシチュウと鶴川の
“焼きたてパンの店” Mille Periaの香ばしいフランスパン、
サラダ2種です。食後に美味しいコーヒーと一緒に作りたて
のクッキーやチョコを頂きましょう。

●参加会費：2000円

●申込&問合せ：☎：042-734-5100 'わんりい'

【3月の定例会】3月12日(金) 11:00～12:30

4月号のおたより発送予定日 3月29日(月) 14:00